



## 第拾卷第六號

### 十七字詩

水無月の雨や甘露の降る心地  
 貫ふ手に笠の雫や燕子花  
 涼み臺笑ひづくして別れけり  
 麥湯煮て晝寢の客を起しけり  
 夏座敷舟横づけて上りけり  
 夕飯や蚊の出ぬ内を親に据へ  
 螢狩思ひがけなく遠走り  
 暑き日や空辨當を腰にして  
 小包で嫁の里から新茶かな  
 古茶新茶象牙の細工譽めながら  
 螢狩思はず知らず土橋まで  
 湯戻りの闇をかすめて螢かな  
 人去りて跡に月澄む清水かな  
 太刀風の一と村戦ぐ幟かな  
 夕顔や荒れし都の寺小路  
 蝙蝠や鐘も撞かずに暮るゝ寺  
 朝顔や明けぬ内から叩く木戸  
 甲板に誰が尺八ぞ夏の月

柳 同

盛 磨 雄 零